

「学校 - アート - テクノロジー」(天野一夫)

(展覧会カタログより作品該当箇所抜粋)

小杉美穂子+ 安藤泰彦の「Pendulum (振り子) 1996」は、先に展示を試みた京都の同じく廃校となった龍池小学校の卒業アルバムの写真を主要素材としている。暗がりの教室中央に用意された、電気椅子のような金属製の強制的な構えの椅子に一人ずつ座して、明治初年に設立され、共に百二十数年もの歴史を経た小学校〔龍池小学校は 1870 (明治 2) - 1995.3 赤坂小学校は 1871 (明治 3) - 1992.3〕の具体的な教師と生徒というその記録写真上の人々と我々は向きあうこととなる(本来はこの場のオリジンとしての、本校の写真を活用すべきとおもわれるが、資料散逸のゆえ不可能だったとも聞く)。向かって左上には時が止まった現実の時計が壁に掛かり、そして下には振り子の動くモニター上の画面が時を代わりに刻む。我々が椅子に付くとともに現われた近年の卒業の画像は、その振り子の動きを伴ってそこから百年以上の時を遡及してゆく。数人にすぎない廃校寸前の現代の子供の明快なカラー画像から始まり、次第に画像はセピア色となりながらも、ファッション・建物、教師と生徒の位置・関係、そしてその面貌の変容を微細に確認しつつ、我々はこのかつてあって今はない無数の少年・少女たちに応接する。ある近代制度の中で生活していた彼らが最後に儀式として映されるたった一枚の記録。その中で見せる硬直した面持ちをした彼らと同様に、強制的な姿勢で我々は相対することとなる。一枚ずつ時をさかのぼるうちに規律正しい制度の強固だった時代にいたり、時にその一枚の写真の中の少女へと画像はクローズアップしてゆく。全体としての制度性を意識せざるを得ない全景写真から、ある匿名の人へと近接することで個人が浮上してくる。その近代の時を背負った突然のコミュニケートに我々はたじろぐだろう。匿名の人は、同時にかつての私でもある。その積層態としてこの地、この私も在ると実感する、いわば近代史の資料貯蔵地(データベース)として、この作品は実際の資料室に隣接した、会場の劈頭に在った。《劈頭一裂け口》としての入り口。